

第45回大会シンポジウム報告

着実なスキルアップを図ることができる。そのためには、近隣での研修への参加を可能とするような勤務環境の整備が必要である。特に、教育の研修会に保育所職員が参加できるような働きかけが重要である。

障害に関する専門性をもつことで保護者との関係を良好にすることが可能となる。福祉制度に関して詳しい職員がいることは必要であるが、園内で抱えこまない姿勢が重要である。保護者の障害受容のためには他機関との役割分担が効果的である。たとえば、保護者対象の研修会に障害児施設の職員が参加することで、発達の話のなかに自然に障害の話に関連させるような工夫をすることができるようになる。

制度的な問題は、幼保で定数配分等格差があるため、より適切な状態を行政に働きかけることが必要である。発達障害や気になる子の支援方法は専門家に考えてもらうという姿勢ではなく、ともに支援するための環境整備が必要である。

3. まとめ

就学前期における「特別ニーズ」保育への支援においては、関係機関が連携することの意味を考える必要がある。

複数の機関がかかわる場合、この点をないがしろにすると一方が一方の代替をする閉鎖的な関係になってしまう。連携が効果を上げるためには、それぞれの専門性の幅を広げたり、深めたりするような開放的な関係が築かれる必要がある。

自主シンポジウム 53

DN-CAS 認知評価システムの
障害児への適用について

企画者 岡崎 慎治 (筑波大学)
司会者 岡崎 慎治 (筑波大学)
話題提供者 岡崎 慎治 (筑波大学)
前川 久男 (筑波大学)
中山 健 (福岡教育大学)
指定討論者 小林 久男 (埼玉大学)
野口 和人 (宮城教育大学)

1. 企画趣旨

DN-CAS 認知評価システム (DN-CAS) はプランニング・注意・同時処理・継次処理 (PASS) モデルを背景とした、子どもの認知能力を評価する検査バッテ

リーである。米国では Naglieri と Das によって 1997 年に標準化され、国内でも標準化調査を終え、本年から発売されている。

DN-CAS は、これまで国内で使用されてきている WISC-III や K-ABC とともに、子どもの認知処理を評価する手段として有用であると考えられる。DN-CAS は K-ABC が測定する同時処理と継次処理に加え、プランニング (実行機能に対応する) と注意 (反応抑制、選択的注意) を PASS モデルとして測定評価する点で、これまでの認知機能を評価する検査と異なる。また、PASS モデルは Luria の高次認知機能に関する脳の 3 つの機能的単位 (プランニング、注意、符号化 (同時処理と継次処理)) の概念に基づき、これらの脳機能を評価することを意図したものである。

本シンポジウムでは、話題提供者より日本版 DN-CAS の標準化過程と理論的背景、予備調査における因子構造、DN-CAS 実施事例について報告し、指定討論者より話題提供を受けて DN-CAS をどのように理解し、結果を支援に活かしていけるかについての問題提起、検討を行った。

2. 話題提供

(1) DN-CAS の概要について (前川久男) : DN-CAS は、Luria による脳の機能単位の理論から Das らによって提唱され、研究が続けられている PASS (プランニング、注意、同時処理、継次処理) 理論に基づく認知検査として 1997 年に Naglieri と Das によって開発された。日本版 DN-CAS もまた、このような研究の基盤と哲学的背景に成り立って開発されたものである。本報告では日本版 DN-CAS を単に検査としてとらえるにとどまらず、子どもの認知発達の特徴をとらえ発達を保障するものとして考えるためのいくつかの先行研究が紹介された。また、DN-CAS に含まれる下位検査の一部を紹介することを通して、DN-CAS が測定しようとするものが何か、そこからどのような支援が考えられるのかについて紹介された。

(2) DN-CAS の因子構造について (中山 健) : 日本版 DN-CAS の標準化調査を開始する前の研究として、日本語表記にしたオリジナル版の DN-CAS を 214 名の幼児・児童に実施した。本報告ではまず、この調査における下位検査評価点のデータを検証的因子分析した結果が報告された、続いて予備調査をふまえた日本版 DN-CAS のオリジナル版との変更点が紹介され、標準化調査の対象となった 5 歳~17 歳 11 か月

第45回大会シンポジウム報告

の1,201名の下位検査評価点のデータを検証的因子分析した結果が報告された。これらの結果から、DN-CASの下位検査が測定しようとする認知処理を説明するモデルとしてPASSモデルが最も適したモデルであること、日本人を対象とした場合でも、PASSモデルを確認することができたことが報告された。

(3) DN-CASの適用事例について(岡崎慎治): 本報告では、心理教育アセスメントとしてDN-CASを適用した事例として、学習全般に困難を示し、特別な支援を受けている小学3年の女兒について報告した。本児のWISC-IIIの結果からは全般的な認知発達の遅れが疑われ、DN-CASの全検査標準得点もこれを支持するものであったが、PASS平均標準得点に対してプランニングと注意は有意に強い(5%水準)こと、同時処理は有意に弱い(5%水準)ことが示された。これらの結果から、一度理解できたことには一定時間集中でき、作業に取り組めるが、理解の手がかりがない状況では困難であること、プランニングと注意は比較的強い部分と考えられることから、日常生活での行動調整の困難は自分の方略を言語化することや、言語による行動調整の経験の少なさによると考えられると推察された。このような事例への援助として、同時に継次からの継次処理の強さを生かした指導と、言語による方略による同時処理の弱さを補う指導が有効であることが指摘された。

3. 指定討論

小林久男氏(埼玉大学教育学部)からは、PASS理論に基づく神経心理学的検査が紹介されるとともに、DN-CASのPASS尺度(プランニング、注意、同時処理、継次処理)それぞれの確認と、実施にあたっての検討課題が指摘され、方略、適切な問題数、処理様式との関連性等の観点から考えてみる必要性と、Luriaの脳モデルを理論的根拠としているならば、それぞれの下位検査と脳の働きとの関係を検討しておく必要性が提起された。また、野口和人氏(宮城大学教育学部)からは、Luriaが人間の高次機能を測定しようとした一方で、concreteでdescriptiveな質的研究を重視し、これらを統合したromantic scienceを構築することを志向していたことが紹介され、DN-CASがLuriaのめざしたものの実現にどのように活用されるべきかについて、特にプランニングの測定という観点から問題提起がなされた。

自主シンポジウム 54

知的障害特別支援学校小学部における 支援的方法論に関する実践的検討

- 企画者 大沼 直樹 (大阪教育大学)
 司会者 池田かおり (大阪教育大学附属特別支援学校)
 話題提供者 池田かおり (大阪教育大学附属特別支援学校)
 大島真佐子 (大阪教育大学附属特別支援学校)
 武田 幸造 (大阪教育大学附属特別支援学校)
 三宅ちさと (大阪教育大学附属特別支援学校)
 山田美也子 (大阪教育大学附属特別支援学校)
 指定討論者 大沼 直樹 (大阪教育大学)
 瀧本 一夫 (大阪府立守口養護学校)

1. 企画趣旨

特別支援教育は一人ひとりの障害を有する児童等の教育的ニーズに基づく適切な教育的支援を実施し、児童等の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援していく教育である。そのためには、教育実践における視点の転換、つまり、教育方法論の転換が必要になると思われる。これまでの教員中心の指導的方法論から児童等中心の支援的方法論へ転換していくことであると考えられる。しかし、現実の教育実践における視点の転換を行うことはたやすいことではない。教育実践の場面において、教員は常に児童等を導くものとしての役割を担い演じ続けることが求められている。導くものとしての役割はそのままに、児童等主体の教育実践へと転換することとは、具体的にはどのような授業を展開することなのか、障害を有する児童等の主体性を尊重するというはどのような授業展開や場を構築することなのか、考慮しなければならないことが山積しているように思われる。

これらのことについて、知的障害特別支援学校小学部における「さんすう・認知」の学習グループごとの実践結果をふまえて、支援的方法について検討したいと考えている。